

スウィフトの生涯 (XVI) ー完ー

1740年7月のスウィフトの書簡から
1745年のスウィフトの死まで

三 浦 謙

最後の遺書作成後ほぼ2ヶ月を経た1740年7月26日、スウィフトはホワイトウエー夫人に次のような手紙を出している。

今日はツンボが酷く、たいへん痛みます。頭が混乱していて心身がうけている苦痛をあらわしようがありません……こうして書いていてもなにを書いているのか理解できない有様です。もう長くはありません。まちがいなければ今日は1740年7月26日土曜日でしょう。月曜まで生き永らえたら、おそらく最後になりましょうが、もう一度あなたにお会いしたいと思います⁽¹⁾。

だが、スウィフトの^{いのち}生命は、その後、早々に絶たれることはなかった。1741年は小康状態を保ち、1742年恐れていた悲運⁽²⁾が容赦なくスウィフトを襲った。同年11月22日ホワイトウエー夫人はオルリー伯にスウィフトの容態の急変を次のように^{つばさ}具に知らせている。

主任司祭^{デ イー ー ン}との意志の疎通は全くできなくなりました……私が彼にそれと分る最後の人間でした。人の見分けがつかなくなると、だれを見ても乱暴するので、私はやむをえず彼から離れることにしました。人に会った後は彼は一晩も二晩も寝つけません。それで、私は週2回こちらにきて、乱暴するといけませんので彼が私に背を向けている間に様子をうかがうことにしました。彼は一日に10時間部屋の中を歩いて、召使がいる間はなににも食べようとしませんし、なににも飲もうともしません。肉は食べやすいように切って出すんですが、時折は食卓に

1時間ぐらいそのままになっていて、食べる時は歩いて食べるんです。6週間ぐらい前、一晩で左眼が卵ぐらいに脹らんで、ニコルス先生は眼が脱疽になると診断されましたが、大きな腫物がいくつも腕と腹部にできました。主任司祭の苦しみようは言い表わしようがありません。彼が自分の眼をもぎとろうとするのを5人がかりでようやく押し止めました。これが1週間くり返されました。ほぼ1ヶ月間彼は1日2時間も寝ていません。でも、ほどほどの食欲はこれまでいつもありました……今は痛もないようです。眼もだいぶよくなりました……先生方はしばらくはこのまゝで落ち着くだろうといっています⁽³⁾。

ホワイトウェー夫人の手紙を読んだオルリーは「なんと衝撃的でなんと沈鬱な話だろう。この上ない才能が神の眼から見るとき、なんとささやかな評価しかえられないことか」⁽⁴⁾ といっただけで嘆息した。

同年12月19日には甥のディーン・スウィフトがスウィフトの身にふりかかった痛ましい事実をオルリー伯に伝えている⁽⁵⁾。当時、牧師館でスウィフトと同居していたフランシス・ウィルソン⁽⁶⁾がいつもスウィフトの身辺にいた家政婦のリッジウェー夫人がいない留守に、スウィフトを貸馬車に乗せてダブリン郊外に連れ出し多量のアルコールを飲ませて酔わせた上狼籍を働いたという話である。スウィフトの適量は半パイントそこそこ、おおよそグラス2杯分であった。スウィフトが2杯飲むとウィルソンはさらに1杯飲むようスウィフトに勧めた。傍にいて見かねたスウィフトの従僕がもう1杯飲むと旦那さまの頭に悪いとウィルソンに忠言してもウィルソンは聞かず、スウィフトにもう1杯飲ませた。その後強い白ブドウ酒を取り寄せて飲ませたので、スウィフトはすっかり酔わされてしまい、人の手を借りずに馬車まで歩いて行けなくなった。ウィルソンはこれでもまだ納まらずダブリンへの帰途、居酒屋に立ち寄ってブランディをスウィフトに飲ませた。こうしておいて、ウィルソンは激しい口調でスウィフトを罵り出したのである。翌朝、スウィフトの腕には、ふつう殴られた後にできる青黒い痣ができていたという。

フランシス・ウィルソンという男は当時ダブリンの聖パトリック大聖堂の管轄下にあったキルマクタルウェー 区の聖職禄を得ていた。野心家の

ウイルソンはその地位にあきたらず、スウィフトが1730年聖パトリック大聖堂の副司祭に指名したジョン・ワイン⁽⁸⁾を引きずり降ろして自分がその後釜に坐ることを画策していた。スウィフトへの接近と妄挙には、すべてウイルソンの下心が絡んでいた。

この一件があってから、甥のディーン・スウィフトはスウィフトの召使たちに、再度かかる無礼な仕打に出るおそれがある時には、人を遣わして内々に知らせるように申しつけた。だが、ウイルソンはそれ以来決してスウィフトに近づこうとはしなかった。この頃から今後スウィフトが不当な仕打を受けないように心神喪失者として法的保護を与えるべきだというスウィフト救済案がダブリンで話題になるようになった。

ほぼ一年半後の1744年4月、甥のディーン・スウィフトがオルリー伯に伝えたスウィフトの最後の近況報告が残っている。ここで、ディーン・スウィフトはこの2年間にスウィフトにまつわる話がいろいろデッチ上げられているといいながら次のような話を紹介している。3月17日、日曜日、スウィフトが椅子にかけていた時、たまたま傍にあったナイフを取ろうとしたので、家政婦のリッジウェー夫人が折りよく取上げると、スウィフトは肩をすくめ軀を揺がせながら、“I am what I am, I am what I am.”と2度3度、つぶやいたという。下僕に用向きを伝えたくとも言葉が出ないと、いらいらしながら、“I am a fool.”と嘆息し、ディーン・スウィフトがたまたま部屋に入ると、“Go, go.”といって手でドアを指し示し、やゝあってから頭に手をやって“My best understanding,”といって言葉を途切らせ、そのまゝ部屋を出て行ったという。これが文字通り記録に残っているスウィフトの最後のことばである。

サー・ウォルター・スコットは1814年刊行の『回想録』⁽⁹⁾の中で、スコットがとりわけ親しかったキンダー卿⁽¹⁰⁾からの伝聞としてスウィフトの下僕がこの頃金をとってスウィフトを見世物としたという話を伝えているが、この時期には看護人がついていたので、この話は信憑性に乏しいと、ハロルド・ウィリアムズは疑っている⁽¹¹⁾。

こうして、さらに一年半後の1745年10月19日、スウィフトは遂に苦難の生涯を閉じた。

だが、スウィフトには死後も安息が許されなかった。メイソン⁽¹²⁾は『聖

パトリック大聖堂の歴史』⁽¹³⁾の中で、スウィフトの遺体にまつわる忌わしい話を伝えている。

スウィフトの遺体を納めた棺^{ひつぎ}には蓋がしてなかった。多くの民衆が弔意を表わすために牧師館を訪れた。遺体の頭には帽子もカツラも被されてなかった。前頭部と頂きには毛がなく後頭部に長い白髪があって、亜麻のように枕に被さっていた。看護人のバーナード夫人⁽¹⁴⁾が枕元についていたが、用向きがあってしばらく席を空けた時、遺体の頭髪が一房、何者かに盗まれたというのである。

ハロルド・ウィリアムズ編集の『スウィフト書簡集』はスウィフトの死後3日を経過した1745年10月22日付の遺言執行人⁽¹⁵⁾にあてたホワイトウエー夫人の手紙で終わっている。この中で、ホワイトウエー夫人はスウィフトの遺体の処理を憤り、次のように善後処置を訴えている。

遺体は夜中の1時に4人の人夫が裏口から教会内に運び込む。そのさい、2人の聖職者が随くだけというのは本当ですか。……これは法律上キリスト教に基づく埋葬が許されない犯罪者を処刑後、ごく近親の者がとる手だてです。スウィフト師のような国の柱となった方の場合でしたら、控え目にすましてほしいと本人が遺言でいってはいいても、遺体を安置してある部屋には黒い垂れ布をかけ、霊柩者1台に、葬送車2、3台を用意するぐらいは当り前のことです。下僕のアレキサンダ・マッギー⁽¹⁶⁾が亡くなった時でも、主任司祭^{デーン}はしかるべき葬儀をして聖パトリック大聖堂に葬りました⁽¹⁷⁾。

こういって、費用がかかり過ぎればホワイトウエー夫人自身が受け持つといっている。

スウィフトは兇弾で斃れたり、断頭台の露と消えることはなかったが、1742年以降、最晩年の3年間は廃人となり、全くの痴呆と化した。そして、死後も一房の頭髪が盗まれるというを忌わしい不祥事に見舞われ、葬儀にまで陰鬱な影が漂っている。

ソクラテスはその「弁明」⁽¹⁸⁾の中で、人のためにあるいは国のために力を尽して生涯を全うしえた人間はいないといっているが、スウィフトもその中の一人に算えることができよう。1745年10月19日、玲瓏たる秋天の

下でも、スウィフトの魂はついに安息をうることができなかったのである。

補遺 1. スウィフトは狂人であったか。

スウィフトの死にざまについては2つの相反する話が伝えられている。オルリー卿は「スウィフトは全く苦しまずに安楽な死を遂げた。死に際のラッセル音も聞きとれないほどだった」といっている。デラニーとハウクスワース⁽¹⁹⁾はこれと同じことを記録している。

ところが、スウィフトの伝記を書いている4人（オルリー、デラニー、ハウクスワース、フォークナー）の中で、当時たゞ一人ダブリンにいたフォークナーは「死ぬ前の36時間はひどいひきつけがあり、たいへん苦しんで死んだ」といっている。

いずれの死に方であったにせよ、スウィフトの死後、その遺体解剖にも埋葬にも立合ったスウィフトの忠僕リチャード・ブレナンが後任のマガイアー⁽²⁰⁾に伝えたところによるとスウィフトの頭蓋骨を切り開いたのは狂気の原因を探るためだったという。遺体解剖の執刀医はホワイトウエー医師だった。頭蓋骨を開けてみると、脳にかなりの水が溜っていた。聖パトリック大聖堂の参事会員であったディヴィッド・スティーヴンス⁽²¹⁾がスウィフトの脳には水が溜っているから、トレパン（穿孔器）で孔を穿けて水をとらなければだめだといっていたが、これが事実であることが判った。

19世紀初頭から、ダブリン市内を流れるポッドル川⁽²²⁾がしばしば氾濫したが、当時は下水施設も万全ではなかったので、聖パトリック大聖堂はかなりの被害をうけた。1835年、スウィフトの棺と遺骨への損傷を慮ってスウィフトの遺体発掘が行われ2度目の遺骨検査が行われた。ハウストン医師⁽²³⁾がその時の状況を次のように興味深く伝えている。

硬い檜の棺に損傷はなく遺骨は完全な形で保存されていた。骨には慢性的な疾患の徴候がみられないわけではないが、頭部のいかなる部分にもカリエスやポリープの痕跡はなかった。前頭部全域にわたる脳

の軟膜に生涯、病歴があったことが認められた。この領域の頭蓋骨は厚く平坦で、異常になだらかであり、ところどころ硬かった。頭蓋骨のその他の領域は薄く、ざらざらしていた。

骨に残っている血管の痕跡には異常な点がみられた。脳硬膜の中央部を流れる動脈の痕跡は不自然に大きくて深く刻まれていた。前方に向っている血管の支脈は太くて短かく、末端は異常な数の小分岐になって終っていた。だが、後方に向っている血管は長く整然としていて漸時細くなっていた⁽²⁴⁾。

以上の骨相学上の所見⁽²⁵⁾に加えて、ハウストン医師の病理学上の口述所見が伝わっている。これは 1835 年 8 月 16 日ヘンリー・マーシュ卿⁽²⁶⁾邸で行われた遺体検査に立合った複数の解剖医が認めたものである。

頭蓋骨の底部は蝶形骨の辺りがざらざらしていた。隆起部は突出し、先きが尖っていた。後頭骨の大後頭孔（後頭骨にあって延髄の通る穴）は不規則で骨頭状の隆起物がその中に突出していた。後頭窩、眼窩上部その他の頭蓋骨の一部は薄くて透明だった。円蓋上の脳硬膜を走る動脈の跡は大きくて深く刻まれていたが、円蓋内部の表面は全般的になだらかだった。大脳鎌状膜の連結部の線に沿った骨は多孔性で血管を通す沢山の小さな穴があいていた。正面隆起部の上部は骨が厚かったが、凹んだ個所は平坦で他の個所よりもなだらかだった。この平坦な個所の下部もしくは前面の両側に 6 乃至 7 個ずつ計約 12 個の小さいが深い亀裂の入った孔があった。これはその個所の脳硬膜にポリープ（菌状腫）があったことを示すものである。頭蓋底窩にも上述のに類似した孔が認められたが、これも同じ原因から発生したものと考えられる。頭蓋骨の外側はなだらかで自然だった。頭蓋骨は明らかに頭蓋底窩および頭蓋骨前部の脳硬膜の血管が肥大していたことを示していた。頭蓋骨前面の孔は上下にも左右にも小さく、中央の孔は通常の大きさで、後方の孔はたいへん大きくて深かった。正面の隆起部に相当する内部はくぼみが均一でなく、外側の隆起に相応する陥凹はなかった。2 つの半球とも釣合がとれていて左右対称をなしていた⁽²⁷⁾。

だがW. R. ワイルド⁽²⁸⁾はここに詳述された所見は老年の頭蓋骨にはありがちで、なんらの病症も認められないといっている。

それに、肝心の脳そのものについての記録がないのである。ワイルドは上記の骨相学および病理学上の齟齬のある所見とスウィフト自身が述べている病歴を踏まえながら、スウィフトの病状の進行を次のように類推している。

スウィフトが始めて目まいの発作を起したのは1690年23歳の時である。リッチモンドでゴウルドン・ピピン（リンゴの一種）を100ヶ食べたのが原因だった。それから約4年後、サリー州のテムプル邸から約20マイル離れた野外での読書中風邪をひいて耳がきこえなくなった。それ以来毎年目まいとツンボの発作が起きるようになった。それぞれ過食と湿潤な土地での風邪が原因のこの2つの発作は、いったんかかると治癒しがたく年々疾患の強度は高まり持続期間も長くなってゆく。これは脳充血の症状である。

頑健な軀をいいことに過度の運動をし、医者よりも自身の判断を頼りにしたことも災いした。1740年頃から慢性の髄膜炎や脳炎も併発し顔面の麻痺も起った。長期に亘る過度の血管の拡張は頭蓋骨内部の痕跡から明らかであり、トレパン（穿頭用冠状ノコ）を用いて判明したように漿液の流出は生涯続いていた疑いがある。かかる病状に随伴して全身の萎縮と憔悴、視力の衰え、心悸亢進、記憶力の喪失、言語障害等が起きた。そして、ついに左眼の眼球が突出した。これは脳の前頭葉もしくは脳の被膜の激しい炎症の結果、眼球が化膿したためと考えられる。死ぬ前日まで癲癇の発作が起きたという証拠はないが、死ぬ36時間ぐらい前から激しいけいれんが起きていたように思われる。

結局、ワイルドはスウィフトが長い間患っていた病名を脳充血——病理学的には癲癇性眩暈——とし、75歳から78歳までの最晩年の3年間は老衰の経緯を辿ったとしている。スウィフトが狂人として死んだという通説は認めがたいのである。

それに、1742年頃から大法官裁判所の指示で、スウィフトに看護人がついたこともスウィフトが狂人であったという証拠にはならない。法的にもしくは生理学的に狂人でなくとも法律が干渉する例はいくらでもあるから

である。

結局、スウィフトの死因を狂気にもとめる説は医学的にも法的にも根拠が薄いのである。

補遺 2. スウィフトと音楽

1713 年スウィフトが主任司祭に就任した時、ダブリン聖パトリック大聖堂聖歌隊の音楽水準は低く規律は乱れていた。スウィフトは直ちに音楽水準高上のため、質の改善と規律の立て直しに取りかかった。

外部の圧力に左右されず、歌唱力が優れていなければ隊員にしないというのがスウィフトの原則だった。彼はイングランドに渡りイングランド全土にも候補者をもとめた。1726 年 4 月 16 日付の聖パトリック大聖堂教区牧師ジョン・ウォロール師への手紙で、スウィフトは、

オックスフォードには適当なのがおりましたが、ロンドンでは見つけたいと思っています⁽²⁹⁾。

といている。

彼はイングランド在住の友人たちにも助力をもとめた。アーバスノットは音楽好きで、一寸した作曲もやり讃美歌も手がけたりしていた。アーバスノットは娘ナンシーと共にこの問題では積極的にスウィフトに協力している。1729 年 5 月 8 日の手紙でアーバスノットはバリトン歌手ジョン・メイソン⁽³⁰⁾をスウィフトに推薦している。

バリトン歌手で、まずこれ以上の人はいません。キングズ・チャペルでこの冬、数回歌いましたが、いずれも好評でした⁽³¹⁾。

メイソンは歌手兼作曲家として長いキャリアがあり、1732 年から 1784 年まではダブリンのクライスト・チャーチの教区牧師を勤めた。

だが、聖パトリック大聖堂の聖歌隊員はメイソンのような申し分のない人物ばかりではなかった。1727 年から聖パトリック大聖堂の聖歌隊員となったウィリアム・フォックス⁽³²⁾はよく風邪をひいたといっっては斉唱を怠った。スウィフトは日曜日と祭日の朝、聖歌隊員は必ず礼拝に出るよう

にいう達しを出したが、フォックスは不潔な服装で、時には酔払って礼拝の席に現われたりした。スウィフトは100 シリングを上廻るフォックスの借金の弁済までしている。このような男でも首にはならず1734年死ぬまでの約7年間フォックスは聖パトリック大聖堂の聖歌隊員であった。

1695年には部品交換された古いオルガンの外に、855 ポンドもする新しいオルガンが聖堂内にとりつけられた。そのオルガンには14世紀以来のアイランドの名家であるオーモンド家の紋章が付けてあった。スウィフトはオーモンドの私権喪失⁽³³⁾後もその紋章をとり除こうとはしなかった。

このオルガンはなん度も手を加えられながら20世紀初頭まで聖堂内の演奏に用いられた。ピルキントン夫人は『思い出の記』⁽³⁴⁾の中で、このオルガンに触れ、聖歌隊の整った歌声と荘重なこのオルガンの音色を聞いた時にはミルトンの詩を想起したといっている。

スウィフトは聖歌隊への支出は惜まなかった。スウィフトはこのオルガン保存のため年10ポンドの費用でフィリップ・ホリスター⁽³⁵⁾という調律師を雇入れている。ホリスターは後年、成功してダブリン有数の遊園地であるラネラ遊園地⁽³⁶⁾のオーナーになった。

スウィフト在世中のオルガン演奏者はダニエル・ローゼイングレイヴ⁽³⁷⁾とラルフ・ローゼイングレイヴ⁽³⁸⁾の父子だった。ダニエルは聖パトリック大聖堂のオルガン奏者になる前はウィンチェスター、ソールズベリーおよびダブリンのクライスト・チャーチのオルガン奏者だった。

1719年ダニエルは隠退して息子のラルフに後事を託した。ラルフはスウィフトが死んだ翌々年まで年30ポンドで聖パトリック大聖堂のオルガン奏者を勤めた。1736年30曲の讃美歌の作曲と編曲にたいしてラルフに2ポンド10シリング支払ったという記録が残っている。僅少な額である。

スウィフトの在任中には相当な数の讃美歌が作曲されて聖歌隊はかなり多忙だった。

スウィフトは聖パトリック大聖堂の音楽水準を高めるためには絶えず努力を怠らなかったが、ついに、その努力が報われる時がきた。1730年11月22日聖セシリア祭⁽³⁹⁾の当日、スウィフトは聖パトリック大聖堂を開放して音楽祭を催すまでになったのである。スウィフトはこの音楽祭の一件を「聖セシリア祭——主任司祭の独りごと」⁽⁴⁰⁾という短い詩句の中で次のよ

うにっている。

お硬い聖パトリック大聖堂の主任司祭よ、
音楽の理解となるとロバ並のあなたが
つい最近ドレイピアについて書いておられたあなたが、
こともあろうに外部の演奏者に大聖堂を借用させるとはどういうこと
か。 (1~4)

当日は聖パトリック大聖堂始まって以来の聴衆だった。10時から4時まで
で同席していた大聖堂参事会員デラニーの妻は同日演奏された曲目を次の
ように紹介している。

コルレリ⁽⁴¹⁾の第1コンチェルト
パーセル⁽⁴²⁾の「テー・デウム」ならびに「ユビラーテ」
コルレリの第5コンチェルト
ブロー師⁽⁴³⁾の讃美歌
コルレリの第8コンチェルト

前掲の詩の中で、スウィフト自身ロバ並とっているようにスウィフト
は音楽を得意とはしていなかった。1711年10月ウインザーからステラへ
宛てた手紙の中では、なんども勧められたので音楽会へ行ったが、「30分
で倦きてしまったので、コッソリ退席した」⁽⁴⁴⁾ としている。

だが、スウィフトは音楽が宗教上の行事に威信と美を添えるのに役立つ
と知れば、個人的な嗜好を抑えることができた。カータレット夫人への手
紙でスウィフトは次のようにっている。

私としては音楽なしで祈りを捧げることを好みます。ですが、専門
家によって音楽が宗教上の威信を高めるのにプラスだと考えられるか
ぎり、私は決して音楽をおろそかにはいたしません。私の後継者もそ
うであってほしいと思います⁽⁴⁵⁾。

ところで、ドイツ生まれで後年イギリスに帰化した18世紀の大作曲家
ヘンデル⁽⁴⁶⁾が1741年11月ダブリンを訪れている。フィッシュャムブル・ス
トリート⁽⁴⁷⁾のニールズ・ミュージック・ホール⁽⁴⁸⁾で初演される自作の聖譚

曲『メシア』の指揮をとるためであった。『メシア』はダブリン・慈善音楽協会⁽⁴⁹⁾からの委嘱でヘンデルが作曲した。主な斉唱者に聖パトリック大聖堂聖歌隊員の4人——チャーチ⁽⁵⁰⁾、ラム⁽⁵¹⁾、ベイリーズ⁽⁵²⁾、メイソン⁽⁵³⁾——が選ばれた。演奏者は70人を上廻り、18世紀ダブリンの音楽界で一、二を争う技倆だった。公演に先き立ちヘンデルは入念なリハーサルを行った。怒りっぽいヘンデルは癪癪を起すとドイツ語でわめき散らした。1742年4月第1回公演が行われた。700人の聴衆が集まり、400ポンドを上廻る売り上げがあった。フォーキナーズ・ジャーナル紙⁽⁵⁴⁾外ダブリンの各紙はこぞって、聴衆はだれしも魅了され最高の出来栄であったと讃えた。ダブリンのクライスト・チャーチと聖パトリック大聖堂の聖歌隊員の出来栄に満足したヘンデルは公演後、とくにバスとカウンター・テナーを讃えたという。

1742年8月、ヘンデルは暇乞いに牧師館を訪れている。この時のスウィフトは痴愚同然でヘンデルの礼に応えることはできなかったが、ピルキンソン夫人はこの折スウィフトが「あゝ、あのドイツ人の異才か!」と一言呟いたというエピソードを伝えている。ロバート・ジャクソン⁽⁵⁵⁾のいう通り、これはヘンデルの讃辞を聞いて一瞬正常な意識をとりもどしたスウィフトの喜悦の叫びであったのかも知れない。

注

- (1) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, pp. 192-193.
- (2) 1717年詩人のエドワード・ヤングと散策していた時スウィフトはエルムの老木の枯れた梢を見上げながら、「私もあのように頭から駄目になります」といって歎息した。スウィフト50歳の時だった。
- (3) *Op.*, cit. pp. 207-208.
- (4) *Ibid.*, p. 208.
- (5) *Ibid.*, p. 211.
- (6) Wilson, Francis (b. c. 1695).
- (7) Kilmactalway.
- (8) Wynne, John (d. 1762).
- (9) Sir Walter Scott, *Memoirs*, (1814), p. 459n.
- (10) Lord Kinneddar. 生歿年未詳。
- (11) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, p. 214n.

- (12) Mason, William Monck (1775-1859). アイルランドの歴史家。
- (13) W. M. Mason, *The History and Antiquities of St. Patrick's Cathedral* (1820), p. 411.
- (14) Mrs. Barnard. 生歿年未詳。
- (15) 複数の遺言執行人宛で個人名は書いてない。
- (16) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. V, pp. 215-216.
- (17) McGee, Alexander (c. d. 1721).
- (18) プラトン, 『ソクラテスの弁明』(山本光雄訳) p. 84.
- (19) Hawksworth, John (c. 1715-1773).
- (20) Maguire. 生歿年未詳。
- (21) Stevens, David. 生歿年未詳。
- (22) the Poddle River.
- (23) Dr. Houston. 生歿年未詳。
- (24) W. R. Wilde; *The Closing Years of Dean Swift's Life* pp. 51-54.
- (25) 当時の解剖所見は病理学よりも骨相学が主体だった。
- (26) Sir Henry Marsh. 生歿年未詳。
- (27) Op., cit. pp. 54-55.
- (28) Wilde, William R. 生歿年未詳。医師。医学的な観点から始めてスウィフトの晩年にかんする著作を残した。
- (29) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, p. 129.
- (30) Mason, John. 生歿年未詳。
- (31) Op., cit. Vol. III, p. 332.
- (32) Fox, William. (d. 1734).
- (33) Ormonde, James Butler, second Duke of (1665-1745).

1715年ジャコバイトの首謀者として私権を喪失し、すべての栄誉と財産を剥奪された。オーモンド家は14世紀に遡るアイルランド切っての名家で初代オーモンド伯 James Butler (c. 1305-1337) の妻は Edward 一世の孫娘であった。

第2代オーモンド侯ジェイムズ・バトラーはアイルランド総督, University of Dublin 学長を歴任, Marlborough に代って陸海空全軍の最高司令官まで勤めた。スウィフトは彼の人となりにたいへんな敬意をはらっていた。

- (34) Laetitia Pilkington; *Memoirs* (3vols., 1748-1754).
 - (35) Hollister, Philip. 生歿年未詳。
 - (36) The Ranelagh Pleasure Gardens.
 - (37)(38) Roseingrave, Daniel and Ralph.
 - (37)(38) 生歿年未詳。
 - (39) St. Cecilia's Day.
- Cecilia (?-c. 230) はローマのキリスト教女性殉教者で音楽の守護聖人。

- (40) *The Dean to himself on St. Cecilia's day.*
 (*The Poems of Jonathan Swift* Vol. II, pp. 521-522).
- (41) Corelli, Arcangelo (1653-1713). イタリアの作曲家でバイオリン奏者。
- (42) Purcell, Henry (c. 1659-1695). イギリスの作曲家。"Te Deum" (「神なる汝を」), "Jubilate" (「汝らよろこべ」)。ともに讃美歌。
- (43) Dr. Blow. 生歿年未詳。
- (44) *Journal To Stella* Vol. II, p. 375.
- (45) Robert W. Jackson; *Jonathan Swift Dean and Pastor* p. 153.
- (46) Handel, George Frederick (1685-1759). ドイツ生まれの作曲家。1726年イギリスに帰化。
- (47) Fishamble Street.
- (48) Neal's Music Hall.
- (49) The Dublin Charitable Musical Society.
- (50) Mr. Church
- (51) Mr. Lamb.
- (52) Bailys.
 (50) (51) (52) 生歿年未詳。
- (53) Mr. Mason cf. (30).
- (54) Faulkner's Journal.
- (55) Jackson, Robert Wyse. 生歿年未詳。cf. (45).

主要参考文献

- Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).
- Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift*, D. D. (London, 1908).
- Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift*, D. D. (Edinburgh, 1824).
- Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).
- Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).
- Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).
- W. R. Wilde, *The Closing Years of Dean Swift's Life* (Hodges and Smith, 1849).
- R. W. Jackson, *Jonathan Swift Dean and Pastor*
 (Society for Promoting Christian Knowledge, 1939).

正 誤 表

第31巻第4号(通巻93号)掲載分の「スウィフトの生涯」(XV)を次のように訂正します。

	誤	正
P. 97 本文上より4行目	荒野に軀り	荒野に駆り
P.104 本文下より2行目	スウィフトム	スウィフト
P.107 本文上より11行目	マシュー・ライヤー	マシュー・プレイヤー
P.113 注(16)	P.473-474	PP.473-474
P.114 注(34)	Barber John	Barber, John
P.114 注(38)	James	James.
P.114 注(48)	Kendrich. Roger	Kendrich, Roger